

ATEM Newsletter



全国大会特集号

October, 2016

発行 映画英語教育学会
住所 〒169-0075
東京都新宿区高田馬場
4-3-12アルク高田馬場4F
TEL 03-3365-0182
FAX 03-3360-6364
E-mail office@atem.org
郵便振替 00820-3-1477

映画英語教育学会 / The Association for Teaching English Through Movies

■会長挨拶

Let us move on and mull over things for our future!

映画英語教育学会 会長
倉田 誠 (京都外国語大学)
ATEM President
Makoto KURATA
(Kyoto University of
Foreign Studies)



Ladies and Gentlemen,

Please allow me to start off my front-page greetings by giving you the gist of inspiring highlights of the 22nd National Convention we hosted at Waseda University on July 9th, 2016. The theme of our Tokyo academic rendezvous, as you might remember well, was "Refining Sensitivity to English Usage and Culture through Visual Media. An appealing array of superb speeches and symposia was painstakingly prepared and presented by the ATEM and STEM national convention organizers and delegates. I would like to take this opportunity to thank the Higashinohon chapter members once again for bringing off such a successful conference.

I would concurrently like to express my gratitude to Professor Yunjoon Jason Lee (Duksung Women's University) for making a very interesting and informative morning presentation on behalf of STEM, our Korean partner organization. My special thanks also goes to Professor Jennifer Barker and Professor Jeff Berglund (Kyoto University of Foreign Studies), who, by showing several carefully selected movie scenes, filled us in on some of the cultural elements we tend to turn our backs on in classroom settings. Finally, I feel much indebted to Professor Mark Petersen (Meiji University), who zeroed in on intriguing examples of irony, sarcasm and cynical humor gleaned from the legendary movie Casablanca (1942) and provided us with easy-to-understand explanations on these tacit linguistic phenomena.

Now I would like to ask you to mull over some effective ways to respond to the most frequent inquiries and comments I have tried to field in recent years. Many of their questions are fairly easy to answer, as they are about what we have overtly done for more than two decades. For example, some of our ATEM friends would like to learn how to apply for admission to our organization, when and how often our conferences (both national and regional) are held, how they can submit their papers to our academic journal, what they have to do to participate in STEM's national conferences in Korea, and so forth. However, I sometimes have to fumble for words when people ask me about what we have covertly developed in the past few years. Some people cleverly question that our organizational name (The Association for Teaching English Through Movies) is now a bit too narrow to depict our actual academic content. They even go so far as to claim that the name is no longer compatible with our recent conference themes and many of the research presentations we have put forth for the national and regional get-togethers. Admittedly, many of the presentations at our conferences do not necessarily deal with movies these days; they are often skewed toward other forms of audio-visual media, such as TV dramas, YouTube clips, online advertisements, and even technological aspects of various multimedia.

It is really regrettable that quite a few interested outsiders with whom I have exchanged words regarding our academic stance have had second thoughts about joining us. They hesitate to hop in, primarily because our organizational name sounds as if we were exclusively concerned with movies rather than with other tools of audio-visual media. What I am suggesting here is that we might as well ascend to a higher stage and enhance our academic caliber soon by considering adding a little spice to our name and parameter. I would like to wrap up my greetings for now by having you turn over the following maxim in your heads. "Names and natures do often agree." Thank you for your kind attention.

映画英語教育学会(ATEM)第22回全国大会
The 22nd ATEM National Convention
大会テーマ：映画で日本人の英語と心を磨く
Theme: Refining Sensitivity to English Usage and
Culture through Visual Media
2016年7月9日(土) 於：早稲田大学
大会報告

■特別講演

***Casablanca*: Irony, Sarcasm, and Cynical Humor in English** (『カサブランカ』で英語感覚を養う)

By Professor Mark Petersen
 (Meiji University)

『日本人の英語』などの英語に関するベストセラー・教養書の著者として高名なピーターセン教授(明治大学)が、特別講演において、映画『カサブランカ』(46)のセリフに込められた"irony"、"sarcasm"、"cynical humor"について分析した。教授によると、これら3つの要素は英語において一般的に見られるものだが、日本人学生が通常の英語学習のなかで経験することは少ない。しかし、この映画の主要な登場人物であるリック、イルザ、ルノー



署長のセリフには、これらの要素を含んだ表現が少なくない。そこでピーターセン教授は、映像と共に登場人物のセリ

フを実際に提示し、各シーンとの関わりの中でこれらの要素がセリフをいかに味わい深いものにしていくかを分かりやすく解説した。日本人には気付きにくい「遊び」の精神がセリフに命を与えていると教授は語り、講演に感銘を受けた100名以上の聴衆から、大きな拍手喝采を浴びていた。(藤枝 善之)

■STEM特別発表

Building Cultural Texts with Media:

From *Star Wars* to Superheroes

By LEE Jason YunJoon
 (Duksung Women's University)

映画やテレビドラマがよりオーセンティックな英語の学習を推進するのに有効であることはこれまでも多くの研究で実証されてきたが、文化の学習という側面も見過されるべきではないというのが本発表の主張である。なぜなら言語と文化は切り離すことが出来ず、言語の背景にある文化を学ぶことによって目標言語の学習が促進されるからである。ただ、文化の教育をどのように英語教育に取り込むかについてはまだまだ研究の余地があり、本発表ではその一端として *Star Wars* や *Star Trek* 等の Science Fiction で用いられているセリフがいかにテレビその他のメディアで繰り返し用いら



れ、日常の会話にまで浸透していることが示された。これらは一種の geek culture (オタク文化) であるが、決して特殊なものではなく、むしろこういったことを常識として知っていなければ、日常的なコミュニケーションにおけるメッセージを理解することが出来ないのだということを実感させる内容であった。(井村 誠)

■特別シンポジウム

Raising Intercultural Awareness Through Movies

(映画で育む、異文化へのまなざし)

Prof. Jeff Berglund

(Kyoto University of Foreign Studies)

Prof. Jennifer Barker

(Kyoto University of Foreign Studies)

本シンポジウムでは、1) 異文化コミュニケーション論、および 2) 映画学の観点から、映画を用いた言語文化教育へのアプローチが示された。人間のコミュニケーションの9割はノンバーバル・メッセージによって占められていると言われ、その解釈は深く文化に根差している。映画に見られる様々な非言語的記号 (artifacts や

behaviors)に着目し、それらが象徴的に表す意味合いを考えることを通じて、異文化への気づきを促すことができる。また映画が伝えるメッセージは、セリフやストーリーにもまして非言語的なもの(例えば背景イメージ

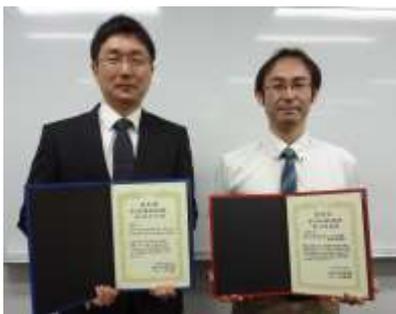


↑ Barker 先生
Berglund 先生→

や動き、光の当て方、撮影アングルなど)によるところが大きい。そのような手法にも着目しつつ、映画が表現メディアとして情感やメッセージをどのように伝えようとしているのかを考えてみることも、異文化理解を深める上で有効であることが示唆された。(井村 誠)

■表彰式・総会

7月9日、早稲田大学14号棟にて、12時より表彰式および総会が開催された。まず、優秀論文賞と本年度設



受賞者の田畑先生(左)、飯田先生(右)

立の研究奨励賞の授与式が行なわれた(右記参照)。総会では倉田会長より、今後の映画英語教育学会は、映画に縛られない、より間口の広い学会のあり方を探り同時に会員数増を

図る旨の方針が示された。続いて今年度で開催が予定されている支部大会および支部研究会などの支部報告があった。次に委員会報告では、紀要編集委員会より紀要の名称が「ATEM ジャーナル『映画英語教育研究』」へ変更になる旨の報告が、加えて、国際交流委員会からは本年9月23日~25日に韓国ソウルで開催される、SAI (STEM-ATEM-ICEM International Conference)への参加呼びかけがあった。最後にH27年度決算報告が行われ、

全会一致で承認された。

(新田 晴彦)

●受賞のことば

<研究奨励賞>

実例と反例を用いた双方向型映画活用法

飯田泰弘 (大阪医科大学)

この度、研究奨励賞を頂戴しましたことは光栄の極みであり、またこの研究奨励賞が設けられて第1回目の受賞ということで、身の引き締まる思いです。選考にあたっていただきました関係者の方々をはじめ、皆様に心より感謝申し上げます。

グローバル化の時代を見据えた英語教育が重要視され、中学校・高等学校でも教室設備の充実化が進む昨今、我々の身近な存在である映画が持つ英語教材としての魅力はますます大きくなっています。そんななか本研究では、映画に登場する非標準的な英語の表現を活用した、新しい映画英語教育法の提案を目指します。音声や映像を使った英語教材の選択肢が急激に増えているいま、再び映画の教材的魅力を掘り下げ、さらなる映画英語教育の発展につなげられるよう、この賞に恥じない研究活動を継続していく所存です。

<優秀論文賞>

Exploring Lexical Bundles in American TV Dramas via Correspondence Analysis

田畑圭介 (神戸親和女子大学)

優秀論文賞を賜り、大変光栄に存じます。会長の倉田誠先生をはじめ、学会員の先生方からご指導を仰ぐ中で、本論文が執筆できたと感じております。さまざまな場面でのコーパスの活用法が検討される中で、テレビドラマコーパスが口語表現の情報源として大きな可能性を持つことをこの度選出していただいた論文の中で示すことができました。Biber らがこれまで論じてきた会話に典型的な lexical bundle がテレビドラマコーパス内の lexical bundle の上位項目とほぼ一致することから、テレビドラマコーパスが会話表現の基本形を含んでいると考えられます。今後テレビドラマコーパスや映画セリフコーパスが学会員の方々にさまざまな枠組みの中で利用される環境づくりに微力ながらも貢献できましたら幸いです。改めまして、この度の受賞に深く感謝申し上げます。

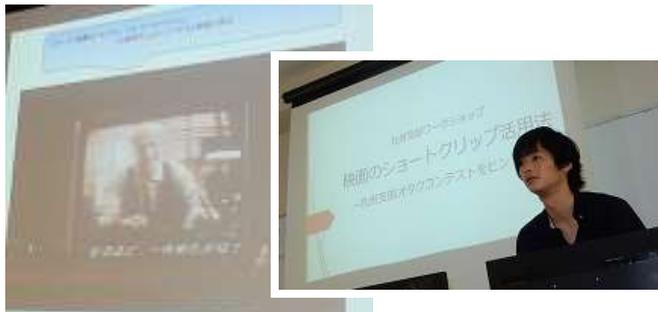
■シンポジウムA

映画のショートクリップ活用法—九州支部オタクコンテストをヒントに—

九州支部では発足以来、支部大会の恒例行事として「映画オタクコンテスト」（以下「オタコン」）を実施している。本ワークショップでは、オタコンから派生した活動として、教育現場で実施された2つの例を示した。

まず、吉村圭先生（鹿児島女子短期大学）がオタコンの実演を行い、2015年に支部大会で実施したもののから8問を「過去問」として出題した。

次に石田もとな先生（西南女学院大学）が『ホームアローン』（90）を用いた専門学校の授業での実施例を示した。中でも劇中ドラマである‘Angels with Filthy Souls’に出てくる「いくらだ？（How much do I owe you?）」という表現に焦点を当て、動詞“owe”の有用性や関連



表現、授業時の学生の反応などについて発表を行った。

最後に藤山和久先生（熊本高等専門学校）が、高専の英語研究部の合宿で行った映画音楽を用いたクイズを実施。『タイタニック』（97）や『スター・ウォーズ』シリーズなど今の学生にも馴染み深い映画音楽が出題されており、学生のモチベーションアップに繋がっている様子がうかがわれた。（九州支部企画）

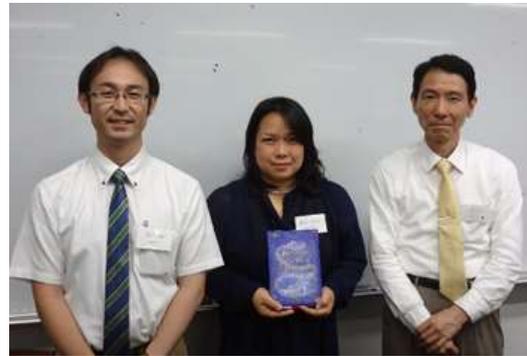
■シンポジウムB

映画『アナと雪の女王』の英語教育への活用法を3つの視点から考える

西日本支部では、藤倉なおこ先生（京都外国語大学）、北本晃治先生（帝塚山大学）、飯田泰弘先生（大阪医科大学）の3人が発表した。

藤倉先生は、ジェンダー論の視点から「ディズニーアニメの女性像」について、従来のお姫様と王子様が結ばれる過程が物語の中心であったディズニー作品とは異なり、ジェンダー・ロールにとらわれない新しい女性像

を提案している点を考察した。北本先生は、コミュニケーション論の視点から「西洋文化圏における＜女性的主体＞のコミュニケーションの特徴について」として、西洋（男性的）文化の中で展開される二人の主人公「アナ」と「エルサ」のコミュニケーションの特徴について、ラ



左から飯田先生、藤倉先生、北本先生

カンの精神分析的視点から分析した。飯田先生は、英語学の視点から「英語授業における『アナと

雪の女王』の語学的活用法」について、語学の観点から比較文を、音の観点から二重母音を、文法・意味の観点から否定文を取り上げ提案した。

各発表者は、素材としての映画を言語・比較文化・コミュニケーションという西日本支部の強みを生かした発表で、多くの参加者を得て盛況であった。

（西日本支部企画）

■シンポジウムC

SF映画の「ヒューマニティ」を文学・言語学の両面から解明する

東日本支部は、日影尚之先生（麗澤大学）、大月敦子先生（専修大学）、小泉勇人先生（早稲田大学）、原田知子先生（武蔵野音楽大学）が、SF映画のヒューマニティとその英語教育への活用をテーマとして発表した。

大月・原田の両先生は、田窪行徳（1994）に従って、感動詞、言い淀み、呼びかけ、接続詞を、話者の心的状態を示す標識として扱い、SF映画7作品のヒューマニティを言語学的視点から考察した。ヒューマニティを表す名台詞とその直前の台詞を分析すると、話者はまず感動詞等を用いて揺れる心理を伝え、名台詞ではそれらをほとんど使わず一気に語る傾向が強いことがわかった。小泉先生は、スペース・オペラ *Guardians of the Galaxy* (14)を取り上げ、学習の効果を論じた。該当場面を通じ、学生はアメリカ口語を学ぶと同時に、話題に挙がる映画 *Footloose* (84)を知ることの間テクスト性を読み解く。

学習者が画の分析に興味を持てば英語にも親しみを抱くことを示唆した。日影先生は PIXAR 映画 *WALL-E*



左から日影先生、原田先生、大月先生、小泉先生

(08)について、アメリカ型消費文化の行き着く先の環境破壊という人類規模の問題を、感情移入し易いロボットたちのロマンスを軸に、親しみ易くかつ皮肉とユーモアたっぷりに描いている点を論じ、教室での活用法としては、英語での場面説明が有効ではないかと述べた。

(東日本支部企画)

■シンポジウムD 医療英語教育における映画の活用法について

北海道支部では、昨年「医療英語教育ワークショップ」を開催したことがきっかけとなり、全国大会シンポジウムでも医療英語教育をテーマとした。

まず足利俊彦先生（北海道医療大学）が、英語学習意識調査から薬学部生の医療系映画やニュースに関する関心の高さに触れ、医療系学部の増加とは相反して医療系映画を題材とした教材が極めて少ない現状を指摘した。



次に松田愛子先生（翻訳者・北海道大学）が、医療系ドラマの多岐にわたる研究に基づき、医療スタッフを目指す人の英会話教材として適すると考える英ドラマ *Doc Martin* (04-)

左から北間先生、渡辺先生、松田先生、足利先生

について、その有効な活用法を提案した。

また渡辺まどか先生（通訳者・天使大学ほか）は、映画を通して、医療系の専門用語や表現のみならず、医療系学生にとって極めて重要な医療文化（医療を取り巻く社会的、文化的状況）についても理解できる授業実践例を紹介した。

最後に北間砂織先生（医療通訳者・藤女子大学ほか）が、医療を専門としない学生を対象に、映画を活用した医療系英語表現の指導方法を紹介した。特に専門用語と一般用語の相違に関する指摘は、非常に興味深い内容であった。（北海道支部企画）

会場スナップ



塚越副会長



STEM Lee 会長



↑特別講演の司会をする
藤枝大会運営委員長



全国大会旗は
東日本支部から北海道支部へ



懇親会司会の吉牟田先生

第23回ATEM全国大会
2017年11月11日（土）
於：小樽商科大学

■研究発表一覧

第22回全国大会の研究発表は下記のとおりである。タイトルの表記言語は発表での使用言語を指す。発表者の敬称は略する。

【Session 1】

中学校英語授業での映画利用法—習慣・思考・表現の日本と欧米の違いに着目して—

河上 昌志 (北都中学校)

映画と文化データベースの展望—MCDBのデータ分析—

塚田 三千代 (映画アナリスト・翻訳家)

邦画『となりのトトロ』と洋画『シザーハンズ』を用いた英語指導

岡本 真由美 (関西大学)

Suitable Visual Media for College Students with Special Needs (hearing impairments)

KIYOSAWA Kaoru (International Christian University)

Using an Animation Movie to Improve Pronunciation Intelligibility: Focusing on Suprasegmentals

RHO Yoon-Ah (Mokwon University)

【Session 2】

方言とステレオタイプ —『オン・ザ・ハイウェイ』の浮気夫がウェールズ英語を話す理由—

山口 美知代 (京都府立大学)

異文化理解のためのパラダイム—米国戦争映画を題材として

深津 勇仁 (福岡女子大学)

前置詞の機能とその根幹 —効果的な指導法を求めて—

平野 順也 (熊本大学)

Five Advantages of Watching TV Series over Movies when Learning English

KOBAYASHI Toshihiko (Otaru University of Commerce)

Refining Sensitivity through American Cultural Film Practices

PRONKO Michael (Meiji Gakuin University)

【Session 3】

高校の授業におけるディストピア映画の可能性—Mad Max Fury Road の使い方を探る—

田口 雅子(とわの森三愛高等学校) 道西 智拓(神田商会)

映画『6才のボクが大人になるまで』を活用した大学生のためのコミュニケーション教育の実践報告

清水 孝子 (日本文理大学)

メディア・テクノロジーとラップの物語 —音楽の脱領土化とアラブヒップホップ—

辰巳 遼 (京都外国語大学)

継続の"in"の用法について

渡邊 信 (麗澤大学)

How to Learn Australian Broad Accent through Movies and Media English

YOSHIDA Masayuki (Waseda University)

Effective Language Learning through Visual Media: Message factors and learner factors

SE-Hoon Jeong (Korea University)

【Session 4】

映画『フルメタルジャケット』に見る英語同族目的語表現の広がり—“You talk the talk. Do you walk the walk?”を考える—

北原 賢一 (麗澤大学)

A Longitudinal Study on the Use of Films with Medical Themes in the Classroom: Do students in medical-related disciplines prefer medically themed films?”

KADOYAMA Teruhiko (Hiroshima International University)

Learning Polite Language Using a TV Drama

KIM Hye-Jeong (Kookmin University)

【Session 5】

語句の多義認識と認知の原理について —one of~の例を基に—

松中 完二 (久留米工業大学)

英語圏での目上の相手に対する「ほめ」の検証

杉浦 綾子 (通訳・翻訳者)

Blending Technology and TBLT: The Otaru University of Commerce Blended Learning Project

THURMAN John(Otaru University of Commerce)

【Session 6】

映画教材 *Shine* を使用しておこなった協働学習のアンケート調査の報告

森永 弘司 (同志社大学)

字幕翻訳における文字数制限ルールの妥当性に関する質的・量的研究—1秒4文字は妥当か?—

豊倉 省子 (文芸翻訳家・関西大学)

The Sequence of Teaching Vocabulary Based on Learners' Interest: With reference to American TV dramas

LEE Ji-Hyun(Kookmin University)

【ポスターセッション】

映画英語における bound to の認識的用法をめぐって

衛藤 圭一 (京都外国語大学)

Beau Brummell (2006) の「ダンディ」講座

河野 弘美 (京都外国語大学・短期大学)

The Great Debaters: English Debating for Classrooms in the Globalized Era

SUDA Tomoyuki (Junior and Senior High School at Komaba, University of Tsukuba)



■支部だより

[北海道支部]

◆これまで支部研究会は毎月行ってきましたが、今年度からは隔月開催となりました。毎回授業や研究成果を共有し、互いを高め合う活動を継続しております。

◆第6回となる本年度の支部大会は2017年3月11日(土)に開催します。場所は支部研究会と同じく、JR札幌駅西口すぐにある小樽商大札幌サテライトです。

◆来年の全国大会は11月11日(土)、小樽商科大学で開催です。小樽でお待ちしております。(支部長:小林 敏彦)

[東日本支部]

◆5月15日(日)麗澤大学東京研究センターで夏期例会を開催しました。5件の研究発表がありました。

◆第22回全国大会は支部役員が協力して運営に参加し、支部シンポジウム「SF映画のヒューマニティを文学・言語学の両面から解明する」においては4名の先生がパネリストを務めました(詳しくはP4)。

◆12月4日(日)に支部大会を開催予定です。詳細は支部サイトをご覧ください。(支部長:渡邊 信)

[中部支部]

◆今年度より新体制の運営委員会が発足しました。スタートしたばかりですが、皆さん張り切っています。

◆2016年度支部研究会は、9月24日(土)、金城学院大学サテライト教室で開催されました。翻訳を担当した網野千代美氏、小寺巴氏(スクリーンプレイ編集者)には、『Audrey at Home』を翻訳して』と題し、質疑応答を含め2時間の講演をいただきました。(支部長:諸江 哲男)

[西日本支部]

◆第14回西日本支部大会を11月5日(土)に京都大学で開催します。特別講演では山内信幸先生(同志社大学文化情報学部長)をお招きし、「“映画”を文化情報学的に科学する一言語的情報に着目して」と題して講演いただきます。シンポジウムでは「映画『スター・ウォーズ』を読み解く」と題し、國友万裕(同志社大学)、ルッケル瀬本阿矢(京都大学)、中村友紀(関東学院大学)各先生が映画を英語教育に生かすことの利点を提案します。同時開催の映画英語学ワークショップでは「映画から見た生成文法研究」をテーマに、4人の先生が議論します。詳細は支部HPをご覧ください。(支部長:横山 仁視)

[九州支部]

◆支部創立から16年目を迎えた本年は、10月29日(土)に福岡大学にて支部大会を開催します。シンポジウムは村田希巳子先生(西南女学院大学)、石田もとな先生(西南女学院大学)、吉村圭先生(鹿児島女子短期大学)に、映画音楽をテーマに発表いただきます。

◆次年度は副支部長の大木先生の勤務校である大分県立芸術文化短期大学にて支部大会を開催する予定です。他の支部の方々のご参加も大歓迎です。(支部長:高瀬 文広)

■委員会だより

[ジャーナル編集]

◆第22号に論文をご投稿くださいました皆様には、数々の玉稿を有り難う御座いました。現在、皆様の論文は査読段階です。結果のお知らせまで少しお待ちください。

◆7月の総会にて紀要の名称変更が決まりました。変更後は、ATEM ジャーナル『映画英語教育研究』です。分野によっては“紀要”への掲載論文はカウントされない場合があるというのが理由です。これに伴い、委員会名もジャーナル編集委員会となります。(委員長:塚越 博史)

[国際交流]

◆第22回全国大会には、姉妹学会であるSTEMからLee Donghan 会長をはじめ総勢18名の先生方が参加され、Dr. Lee Jason Yun Joonの特別発表を含めて5件の発表がありました。

◆姉妹学会であるSTEMの創立20周年を記念して、STEM、ATEM、ICEM(International Council for Educational Media)の3学会が共同開催する、SAI International Conference 2016(第20回STEM国際大会)が、9月23日(金)~25日(日)、ソウル市の国民大学にて開催されました。ATEMからは全国各支部から総勢30名が参加し、2件の共同発表を含む23件の研究発表が行われました。(委員長:井村 誠)

[大会運営]

◆早稲田大学における本年度の全国大会は、約130名の参加者を得て、成功裏に終わりました。今大会では、Mark Petersen 教授(明治大学)による特別講演のほか、Jeff Berglund 教授と Jennifer Barker 客員教授(共に京都外国語大学)による特別シンポジウム、STEM会員による特別発表、各支部による4つのシンポジウム、24の研究発表、3つのポスター発表がありました。ご協力ありがとうございました。(委員長:藤枝 善之)

[会員管理]

◆会員各自に発行されているアカウントへ、本部HPの会員専用ページからログインされますと、お名前、ご所属、メールアドレス、郵送物宛先といった個人情報データの確認・変更が可能です。お手数ですが、まめなアップデートをお願い致します。会の効果的な運営には、より正確な情報が欠かせません。なおページ内では会費の納入状況の確認やジャーナル投稿、全国大会参加申込みが可能です。(委員長:新田 晴彦)

[広報]

◆Newsletter春号の全国大会告知頁を利用したチラシ作成のほか、当委員会では本年より関連雑誌掲載依頼等で大会運営委員会をサポートします。(委員長:松田 愛子)

ICT 担当理事変更のお知らせ (2016.7.9 付)

新田 晴彦 先生(会員管理担当理事・兼任)

■決算報告

第22期 映画英語教育学会【決算報告書】

2015年4月1日～2016年3月31日

収入の部			支出の部		
前年度繰越		1,074,376	大会開催費	大会開催経費用	460,859
会員年会費	2013年度分@5,000 12	60,000	紀要発行費	紀要印刷費(抜刷り含む)	558,900
	2014年度分@5,000 52	260,000	ニュースレター発行費	ニュースレター印刷費	158,436
	2015年度分@5,000 272	1,360,000	ホームページ維持費	ホームページ代	26,676
	2016年度分@5,000 82	410,000	研究活動費	支部活動助成	260,000
	2017年度分@5,000 2	10,000	事務用品費	備品・封筒作成・資料代他	37,714
賛助会費	2015年度分@10,000 10	100,000	通信費	電話代・郵送料・切手代他	137,522
	2016年度分@10,000 3	30,000	雑会費	言語系学会 年会費	10,000
大会参加費	会員@1,000 85	85,000	会議・遠隔地補助	理事会開催遠隔地旅費補助 他	442,241
	非会員@2,000 20	40,000	消耗品費	会計ソフト等	24,860
大会懇親会費	@4,000 51	204,000	懇親会費	懇親会支出額	280,000
書籍売上	CINII・紀要・著作権ハンドブック	134,790	雑費	雑送料他	6,912
受取利息		103			
書籍送料		640			
小計		3,768,909	小計		2,404,120
未払金		86,400		みずほ銀行	310,749
				郵便振替口座	1,088,976
				小口現金	51,464
				翌年度繰越金	1,451,189
合計		3,855,309	合計		3,855,309

※個人会員 340名・賛助会員 13社

2016年5月吉日 上記の通り相違ありません

会計監査 秋月 剛



ATEM Clapper Board

1) 第22回全国大会へご出展いただいた賛助会員は下記の皆様です。この場をお借りしてお礼を申し上げます。(50音順)

記

朝日出版社、金星堂、シードラーニング、成美堂、センゲージラーニング、ネリーズ、ピアソン・ジャパン

2) ATEMの学術活動は皆様の会費で運営しております。未納の方々には、至急お支払いいただきますようお願い申し上げます。

※会費納入方法(振込)については、下記本部ホームページをご参照ください。

<http://atem.org/kaihi>

3) 支部にてワークショップを開催する場合は、運営補助金の申請が可能です(審査あり)。詳細は事務局までお問い合わせください。

(事務局)

<賛助会員一覧>

ピアソン・ジャパン株式会社
株式会社ネリーズ
朝日出版社
成美堂
チエル株式会社
シードラーニング株式会社
金星堂
株式会社近代映画社
松柏社
センゲージラーニング株式会社
株式会社アルビス
広島工業大学学務部 MM 準備室
国際トラベル京都
一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

～編集後記～

◇お忙しい中、本号作成に様々な形でご協力くださいました皆様に、心より感謝申し上げます。
◇本年も全国大会では会長のご挨拶を動画に収めましたので、後日、本部HPに掲載予定です。
◇次号は2017年4月に発行予定です。

[広報委員会] *松田愛子(北海道)、田口雅子(北海道)、杉浦綾子(東日本)、井土康仁(中部)、衛藤圭一(西日本)、鶴田知嘉香(九州) *委員長